

<p>上演 7</p> <p>2022年8月 1日(日) 2校目</p> <p>中部 ブロック (岐阜県)</p> <p>岐阜県立 岐阜農林 高等学校</p> <p>「衣」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(鹿児島県) 鹿児島県立加治木高等学校</p> <p>泊口 愛</p>
--	---

「つなぐ」。この作品から私たちが受けとったメッセージである。

舞台は 22 歳の現代と高校時代の3年間。主人公である社会人のまゆ、ももせ、さくら、りん、ミッツは一堂に会す。しかし、そこに同級生の『ゆうな』の姿だけがない。彼らは仕事の愚痴をこぼしつつも、『あの頃は楽しかった』と振り返る。その青春は決して甘酸っぱくはない。「めっちゃ苦」で、メロンソーダのように弾けていた。

主人公たちは学生時代演劇部に所属していた。その3年間と今を行き来している作品の中で、私たち講評委員も共感できる点が非常に多かった。1年のときの描写があまり無いのも、先輩が気が付いたら引退しているといった流れるように進む最初の1年を表現していてリアルに感じさせられた。そして新型コロナウイルスによって自分たちの先輩が引退のタイミングを失ったのかと思うととても苦しくなった。空間の使い方や場面転換が非常に効果的できれいであった。ほとんど素舞台であったのに場面が伝わり、シーンの切り替わりの際も、「アメンボ赤いな」と、演劇部の発声練習をしながらの行進で演劇部らしさを表しており、観客を飽きさせなかった。まゆの独白も詩を読んでいるかのような気持ちよさがあった。

タイトルにもあるように、「衣」、「服」を作る過程が部活に例えられ、「蚕」と「回顧」が掛詞となっていた。蚕の糸は切れやすく、また、一本でも『糸』がほつれたら衣を作ることはできない。話が進んで行く中でも、照明の白い光や、ゆうなの発した『糸が切れた』というセリフから糸を象徴する描写がいくつもあった。特に、劇終盤、現代のゆうなとまゆの二人が別々の場所で電話をするシーンがある。このとき、サイドからの照明が当てられており、その演出からは過去と未来、そして二人が再びつながって一本の糸になったように感じた講評委員が多くいた。

この舞台について講評委員が熱く討論したのが、『「伝統」とは何か』である。まゆ達は1年の時に当時の3年から託された思いを胸に、全国大会に行こうと奮闘していた。しかし、3年生のときにコロナウイルスの影響で大会が無くなる。まゆは部長としての責任感、ゆうなは伝統を背負っていたことから話がかみ合わず、どちらも苦しいままであった。まゆの言った「私、部長だったのに」の一言に責任の重さや伝統を失う・背負う怖さが表れていたように感じさせられた。それは農業とも重なっている、という意見も出た。実習の先生の、『伝統だって生き物だ』。どちらも水をやらなければ枯れてしまうけれど、育て続ければいつかは実になるものだ。伝統は温かみのあるものだと感じた講評委員もいた。

この作品で一番大切なものは何だろうと考えたとき、やはり「繋いでいくことの大切さ」であると思われた。衣も糸が切れると布にはならない。伝統も引き継ぐ者がいなければ廃れていく。演劇も1人かけたら成立することはない。「繋いでいくこと」を大きな柱として、この作品は生まれたのではないかという結論に達した。